

<研究成果の紹介>

イチゴ「サンチーゴ」の花芽分化促進と空洞果対策

農業研究部園芸グループ

1. 成果の内容

三重県で育成したイチゴ「サンチーゴ」は、慣行品種よりも花芽分化がやや遅れ、収穫開始期が遅くなります。また、頂果房においては収穫初期の果実にガク中央部の亀裂や果実内部が褐変する空洞果が発生し、品質の低下をまねいています。そこで、ポット促成栽培において、11月下旬から収穫するための花芽分化促進技術と頂果房の空洞果の発生を抑制する栽培方法を開発しましたので紹介します。

(1) 「サンチーゴ」の花芽分化促進技術

①窒素中断開始時期

頂果房の花芽分化は窒素中断が早いほど早くなり、7月中旬から窒素中断を行うと9月上旬には花芽が分化します。

②収穫開始時期

果房毎の収穫開始日は、窒素中断時期が早いほど早くなり、頂果房は7月中旬から窒素中断すると11月下旬から、8月上旬から窒素中断すると12月下旬から収穫でき、窒素中断開始を3週間早くすることで収穫開始期を約1ヶ月早くすることができます。また、第1次腋果房の収穫開始期も同様の傾向を示しますが、第2次腋果房以降は差は小さくなります(表1)。

③収量

可販果の総収量は、7月下旬から窒素中断した方が多くなり、特に頂果房の収穫が多くなります。

(2) 「サンチーゴ」の空洞果対策

①施肥と空洞果の発生

頂果房における空洞果の発生は、基肥の窒素量が多いとガクの亀裂が発生し、空洞果の発生率も高くなります。しかし、施肥量を少なくするとガクの亀裂は見られず、空洞果の発生率も低くなるため、基肥は窒素成分で10kg/10a程度

表1 「サンチーゴ」の窒素中断開始日と収穫開始日

窒素中断 開始日	収 穫 開 始 日			
	頂果房	第1腋果房	第2腋果房	第3腋果房
7/15	11/30	2/2	3/22	5/3
7/22	12/11	2/7	3/22	5/6
7/29	12/27	2/24	4/10	5/7
8/5	12/29	2/28	3/20	5/7

が適当です(表2)。

脇果房においては、施肥量を10kg/10aにすると、ガクの亀裂及び空洞果の発生がほとんど見られません。

②ハウス内温度管理と空洞果の発生

ハウス内温度が高いほど空洞果の発生程度指数の高い果実の割合が少なくなり、全体の発生率も低くなりますので、頂果房の開花期以降の1ヶ月間は日中のハウス内最高温度を約31度に管理します。ハウス内温度が高いと糖度が低下しますが、頂果房の糖度は11度以上ありますので、実用上問題ありません(表2)。

2. 技術の適用効果と適用範囲

経営規模の大きなイチゴ栽培農家の作型分散や炭そ病の発生の多いイチゴ農家に適します。

3. 普及・利用上の留意点

- (1) 「サンチーゴ」は親株からのランナーの発生が遅いので、親株は10月上旬に植えます。
- (2) 「サンチーゴ」の育苗においては、7月中旬から窒素中断を行うためには5月下旬からランナーのポット受けを開始し、6月中旬にはランナーを切断します。
- (3) 「サンチーゴ」は吸肥力が高いため、本圃での施肥管理は「女峰」に比べ基肥、追肥とも20%程度減肥してください。

(田中一久)

表2 ハウス温度管理と施肥が空洞果の発生に及ぼす影響

日中温度 (最高温度)	基肥 (N)	空 洞 果							糖度 Brix	
		ガク亀裂		縦長		横長		発生率(%)		
		縦長	横長	縦長	横長	縦長	横長			
高温 (31°C)	N5	0.0	0.1	0.0	3.3	10	0	0	10	11.5
	N10	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0	0	12.0
	N15	6.7	0.4	0.1	6.7	0	10	0	10	11.0
中温 (28°C)	N5	0.0	0.0	0.0	0.0	0	0	0	0	13.6
	N10	0.0	1.2	0.3	23.3	30	20	0	50	13.4
	N15	6.7	2.0	0.6	23.3	50	10	0	60	13.6
低温 (25°C)	N5	0.0	2.2	0.5	17.7	0	60	10	70	15.0
	N10	0.0	1.9	0.4	53.3	10	0	50	60	13.7
	N15	3.3	1.5	0.4	50.0	0	30	30	60	14.1

ガクが空洞果 空室率(亀裂の長さ×幅) / (ガクが空洞果の長さ×幅) × 100 (%)
 0(無) 0 0(無) 無 n=調査個数
 1(小) 3mm以下 1(無) 10以下
 2(中) 4-6mm 2(中) ~50% 200/1/1000
 3(大) 7mm以上 3(大) 50%~